

東京大學

東洋文化研究所

要覽 1992年度

東京大学東洋文化研究所



6413042786

INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE
UNIVERSITY OF TOKYO

C3

45

1992



東洋文化研究所要覧

目 次

I	沿 革	1
II	組 織	5
III	職 員	7
IV	財 政	12
V	施 設	13
VI	図書・資料	15
VII	電算化の進展状況	21
VIII	研究活動	22
	A 部門研究	22
	B 班研究	38
	C 定例研究会	68
	D 内外学術研究・調査	83
	E 国際学術交流	93
	F 学内関連部局との協力体制	120
	G 国内研究機関との協力活動	121
	H 学内教育参加	124
	I 刊行物一覧	131
	J 執筆論文・出版物総数・受賞	140
IX	所員の活動	141
X	附属東洋学文献センター	245

I 沿 革

(1) 設立目的

本研究所は1941年11月26日、東洋文化の総合的研究を目的として、東京（帝国）大学に設置創設された。当初は哲学・文学・史学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の3部門で、附属図書館内に研究室、書庫、事務室を置いて発足した。1949年、新たに3部門が増設されたのを機会に組織を細分化し、哲学・宗教部門、文学・言語部門、歴史部門、美術史・考古学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し、これまでの附属図書館内研究室を分室とし、研究の発展をはかった。

ついで1951年、人文地理学部門と文化人類学部門が加えられたが、アジア諸地域の基礎的研究の重要性が増大するに伴い、地域区分を軸とした将来計画のもとで、従来の諸科学の専門体系による部門構成を、汎アジア経済部門・汎アジア人文地理学部門・汎アジア文化人類学部門、東アジア政治・法律部門、東アジア歴史部門、東アジア美術史・考古学部門、東アジア哲学・宗教部門、東アジア文学部門の8部門に再編成し、さらに地域部門の増設計画を立てた。そして1960年には南アジア政治・経済部門、1964年には東北アジア部門、1968年には西アジア歴史・文化部門、1973年には東南アジア経済・社会部門、1978年には西アジア政治・経済部門が増設されて、ようやく13部門を擁するに至った。

なお1966年には、東洋学に対する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として、東洋学文献センターが附属施設として設置された。

本研究所の研究者は各々の専門に従った独自の課題のもとに研究活動を進め

I 沿 革

ながら、しかし各専門分野の孤立を避け、アジア諸地域の総合的研究を推進するという所期の目的を達成するために、合同の研究会、各種研究班によって学際的研究を育て、また研究陣容の補強を図るため、学内外の専門研究者に研究を委嘱し、協力を求める方針をとってきた。

しかしながら、アジア諸地域全体が世界史的転換期に入った今日、本研究所が、わが国のアジア研究の中核的、指導的役割を果たすために、研究内容の充実、規模の拡大を含む組織上の再編成を行うことが必要となった。そこで、1981年より新しい構想にもとづくいわゆる大部門制を採用し、これまでの13部門を、汎アジア部門、東アジア部門、南アジア部門、西アジア部門の4部門に統合し再出発することになった。

創立以来23年にわたって、本研究所は附属図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが、1964年に、本郷構内に建物を新築する計画が具体化した。1964年から1967年にかけて工事が行われて総合研究資料館との合同庁舎が完成し、5階以上を本研究所が使用することになった。

しかし、研究組織の拡充、研究活動の多様化、図書・資料の増加などに伴い、狭隘な施設の改善、とくに書庫の緊急設備等の強い要望があり、1977年から施設設備の拡充の必要性を強調してきた。1982年に至ってこれが認められ、総合研究資料館との交換分合により、本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これに伴って全面的に改修工事を行い、1984年3月に工事が完成し、本研究所の建物総面積は6,577平方メートル、地下1階、地上8階となった。3階までを所長室、事務室、図書室、附属東洋学文献センター、会議室、演習室等とし、4階以上は各研究部門の研究室である。なお地階から8階まで（2階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。

(2) 将来計画

1991年11月末に、本研究所は創立50周年をむかえた。丁度このような時期になって、研究所の多くのスタッフは、日本のアジア研究がおかれている社会環

境の変化を受けて、本研究所も研究課題の設定や研究組織の面で大きな転換をする必要が生じてきているのではないかと考えるようになっていた。そしてここ数年将来計画委員会を中心にしてこれら研究課題・研究組織の面での将来構想の検討が行われてきたのである。以下その主要な論点を紹介してみよう。

研究課題面では、今日まで本研究所が蓄積してきたある地域の特定テーマに関する一次資・史料にもとづく研究に追加して、比較論や関係論の面での研究を充実させていくことが必要となってきたと思われる。本研究所の将来においても、ある地域の特定テーマに関する本格的研究の継続・発展が重要であり続けることは間違いないが、こういう専門的研究をこえてよりひろい視点からアジア研究の課題を設定していくことが必要となっていることは確実である。そのひとつが、比較という視点の明示的な導入である。ある地域の文化の特定側面をアジア内外をふくめた他地域との比較の視点から豊かに解読していく研究をもっと組織化して行う必要があるだろう。もうひとつは、アジア諸地域間の交流ないし関係を研究対象とする研究分野の新設である。古代から現代までアジアの多くの地域は決して孤立して存在してきた訳ではない以上、このような研究分野の新設が必要であることはほぼ自明であろう。

研究課題面でのこのような構想は当然、本研究所の研究組織面での拡充計画に結び付いてくる。現在の大部門制の下で、比較論・関係論を直接対象としている研究分野としては、汎アジア部門に比較思想・国際政治が設置されているだけである。汎アジア部門だけでなく、東・南・西アジア部門にも比較論・関係論を対象とする研究分野の増設を要求していく必要があるだろう。また比較論や関係論の研究を効率的にすすめていくためには、世界的規模で多様な研究者間に柔軟なネットワークづくりが容易な形態での研究の組織化が不可欠である。このため、現在各部門ごとに外国人客員部門の新設を概算要求しているところである。

研究方法の面では、これからは現地定着型研究の組織化が最も望まれるところである。今日まで本研究所においては、主として校費によるアジア諸地域の文献・資料の収集と科学研究費による現地調査とが研究方法の柱となってきた。

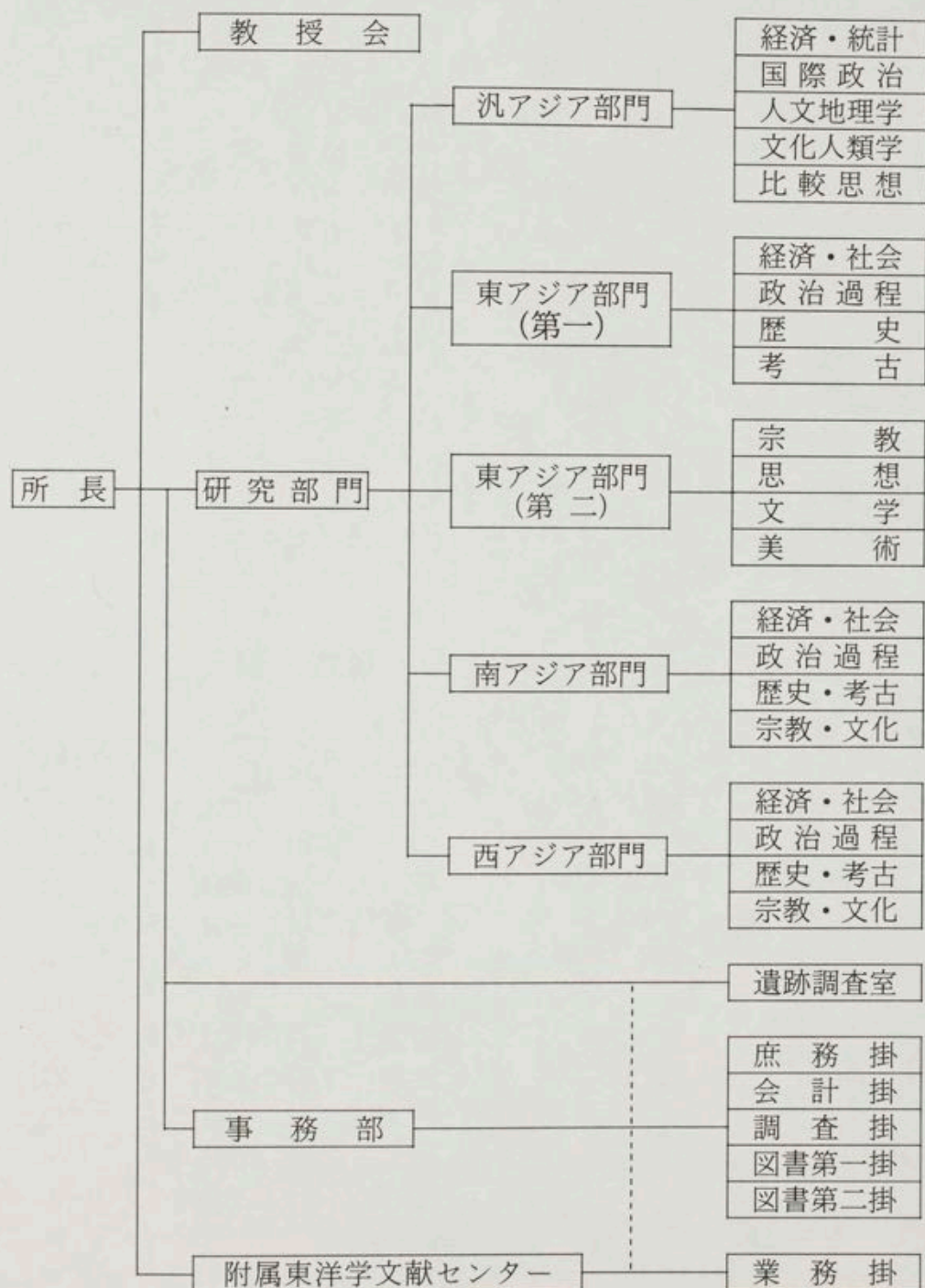
I 沿 革

しかし、この両者をより活性化・積極化させるためにも、また国際共同研究を本格化し継続させていくためにも、どうしても現地定着型研究を組織化していくことが必要となってきたと判断して、東・南・西アジアのそれぞれに最低2カ所は本研究所の海外研究基地を作ることをご構想し、その一部については既に概算要求もしているところである。

さらに、若手研究者の育成自体もアジア研究の重要な一環であると位置づけて、東京大学内における大学院教育により積極的にとりくむことも構想している。特に比較論・関係論の分野での本格的研究の進展にとっては、社会・人文諸科学のディシプリンを習得した上でかつ複数の言語をも習得した研究者の育成が必要不可欠となつてこようが、このような研究者の育成を目的とする本研究所自体が主体となる新たな大学院の専攻の設立を構想している。

本研究所の第二の50年をより充実したものとするためにも、以上簡単に紹介してきた将来計画を少しでも実現させていくことが絶対に必要となつてこよう。

II 組 織



歴代所長

氏名	在職期間
桑田 芳蔵	1941. 11. 26-43. 3. 31
宇野 圓空	1943. 4. 1-46. 10. 5
戸田 貞三	1946. 10. 6-47. 9. 30
辻 直四郎	1947. 10. 1-54. 3. 31
仁井田 陸	1954. 4. 1-58. 7. 10
飯塚 浩二	1958. 7. 11-60. 7. 9
結城 令聞	1960. 7. 10-62. 7. 9
江上 波夫	1962. 7. 10-64. 7. 9
飯塚 浩二	1964. 7. 10-65. 2. 28
小口 偉一	1965. 3. 1-66. 3. 31
川野 重任	1966. 4. 1-68. 3. 31
小口 偉一	1968. 4. 1-70. 3. 31
泉 靖一	1970. 4. 1-70. 11. 15
川野 重任 (事務取扱)	1970. 11. 16-70. 12. 17
鈴木 敬	1970. 12. 18-72. 3. 31
荒 松雄	1972. 4. 1-73. 3. 31
窪 徳忠	1973. 4. 1-74. 3. 31
佐伯 有一	1974. 4. 1-76. 3. 31
大野 盛雄	1976. 4. 1-78. 3. 31
深井 晋司	1978. 4. 1-80. 3. 31
中根 千枝	1980. 4. 1-82. 3. 31
大野 盛雄	1982. 4. 1-84. 3. 31
尾上 兼英	1984. 4. 1-86. 3. 31
山崎 利男	1986. 4. 1-88. 3. 31
斯波 義信	1988. 4. 1-90. 3. 31
池田 温	1990. 4. 1-92. 3. 31
松谷 敏雄	1992. 4. 1-現在

名誉教授

氏名	称号授与年月
米澤 嘉圃	1967. 5
江上 波夫	1967. 5
川野 重任	1972. 5
窪 徳忠	1974. 5
鈴木 敬	1981. 5
荒 松雄	1982. 5
佐伯 有一	1983. 5
大野 盛雄	1985. 5
松井 透	1987. 5
中根 千枝	1987. 5
関 寛治	1987. 5
尾上 兼英	1988. 5
鎌田 茂雄	1988. 5
山崎 利男	1990. 5
結城 令聞	1991. 5
板垣 雄三	1991. 5
池田 温	1992. 5
山田 三郎	1992. 5

歴代事務長

氏名	在職期間
山高 力三	1941. 11. 27-42. 9. 30
根本 喜蔵	1942. 10. 1-44. 7. 9
長内太郎吉	1944. 7. 10-54. 7. 15
工藤松之助	1954. 7. 16-63. 10. 31
宮本 健	1963. 11. 1-69. 2. 28
新井 康次	1969. 3. 1-74. 3. 31
斎藤 益	1974. 4. 1-77. 6. 30
三浦 皓守	1977. 7. 1-81. 3. 31
伊東秀三郎	1981. 4. 1-83. 3. 31
岡部 藤男	1983. 4. 1-86. 3. 31
木内 義一	1986. 4. 1-90. 3. 31
江澤 兵治	1990. 4. 1-92. 6. 1
石川 純男	1992. 6. 1-現在

III 職 員

所 長 松 谷 敏 雄

汎アジア部門

原 洋之介	教 授 (707室)	戸 田 禎 佑	教 授 (507室)
猪 口 孝	教 授 (702室)	小 川 裕 充	助教授 (510室)
田 中 明 彦	助教授 (610室)	林 秀 薇	助 手 (513室)
友 杉 孝	教 授 (703室)		
松 井 健	助教授 (811室)		
末 成 道 男	教 授 (711室)		
関 本 照 夫	教 授 (712室)		
福 嶋 真 人	助 手 (709室)		
岡 本 サ エ(兼)	教 授 (607室)		

南アジア部門

加 納 啓 良	教 授 (608室)
柳 澤 悠	教 授 (603室)
上 村 勝 彦	教 授 (602室)
永ノ尾 信 悟	助教授 (611室)
小 倉 泰	助 手 (612室)

東アジア部門 (第一)

濱 下 武 志	教 授 (411室)
宮 嶋 博 史	助教授 (410室)
川 村 康	助 手 (412室)
松 丸 道 雄	教 授 (407室)

西アジア部門

鈴 木 董	教 授 (803室)
松 谷 敏 雄	教 授 (807室)
羽 田 正	助教授 (810室)
後 藤 明	教 授 (808室)
鎌 田 繁	助教授 (802室)
林 佳世子	助 手 (813室)

東アジア部門 (第二)

蜂 屋 邦 夫	教 授 (502室)
丘 山 新	助教授 (508室)
田 仲 一 成	教 授 (511室)
丸 尾 常 喜	教 授 (503室)
山之内 正 彦	助 手 (512室)

遺跡調査室

前任技術専門職員	古 山 学
技術専門職員	千代延 恵 正

Ⅲ 職 員

事務部

事務長 石川純男
 総務主任 下野 茂
 図書主任 酒入丈夫

図書第一掛

図書第一掛長(併) 酒入丈夫
 事務官 芳賀満子
 事務官 長野 眞
 事務官 新居弥生

庶務掛

庶務掛長 堀内 勉
 国際交流主任 結城剛吉
 庶務主任 益子一郎
 事務官 斎藤英二

図書第二掛

図書第二掛長 佐多正子
 事務官 笠井伊里
 事務官 山口 淳

会計掛

会計掛長 高野 胖
 会計主任 岡 徹
 事務官 瀬見千恵子
 事務官 常田信彦

附属東洋学文献センター

センター長(併) 松谷敏雄
 センター主任 岡本サエ

調査掛

調査主任 木村源蔵

業務掛長 鈴木邦明
 事務官 哇浦美矢子
 事務官 神田百合枝
 事務官 渋谷義治

職員数 (1992年4月1日現在)

教授	18名	助教授	8名	助手	6名
研究担当	36名	研究協力	136名		
事務官	22名	技官	2名		

定員

年度	教授	助教授	講師	助手	教官計	事務官	合計
1941	3	3		6	12	2	14
1948	6	6		9	21	18	39
1949	〃	〃	3	11	26	25	51
1951	8	8	〃	13	32	24	56
1955	〃	〃	〃	〃	〃	23	55
1956	〃	7	〃	〃	31	〃	54
1958	〃	〃	〃	〃	〃	24	55
1959	〃	8	2	〃	〃	〃	〃
1960	9	9	〃	11	〃	〃	〃
1961	〃	〃	〃	〃	〃	27	58
1962	〃	〃	〃	〃	〃	28	59
1964	10	10	〃	12	34	30	64
1966	〃	11	2	13	36	31	67
1967	〃	〃	〃	14	37	32	69
1968	11	12	0	14	〃	33	70
1969	〃	〃		13	36	〃	69
1971	〃	〃		〃	〃	32	68
1973	13	13		10	〃	〃	〃
1974	〃	〃		〃	〃	31	67
1975	〃	〃		〃	〃	30	66
1978	14	14		〃	38	〃	68
1979	〃	〃		〃	〃	29	67
1981	22	15		2	39	28	〃
1983	〃	〃		〃	〃	27	66
1985	〃	〃		〃	〃	25	64
1987	〃	〃		〃	〃	24	63
1991	〃	〃		〃	〃	23	62

以下現在にいたる。

III 職 員

所内委員会と委員数

(1992年4月現在)

委員会等名称	人数
国際交流委員会	5名
図書委員会	9名
刊行委員会	7名
要覧ワーキンググループ	7名
研究連絡委員会	7名
将来計画委員会	9名
建物委員	2名
電算化問題検討委員	3名
文献センター専門委員会 (文献センター委員会)	8名
文献センター運営委員会	10名

教職員の異動等 1990年4月～1992年6月

(教官)

1990. 4. 1 助手 (東洋学文献センター) 山之内正彦 助手 (東アジア部門 (第一)) に配置換
1990. 8. 1 末成 道男 教授 (汎アジア部門) に採用
1990. 8. 31 教授 高嶋 謙一 任期満了により退職
1991. 3. 31 教授 斯波 義信 停年退職 (東アジア部門 (第一))
1991. 3. 31 教授 板垣 雄三 停年退職 (西アジア部門)
1991. 4. 1 助教授 関本 照夫 教授 (汎アジア部門) に昇任
1991. 4. 1 永ノ尾信悟 助教授 (南アジア部門) に転任
1991. 4. 1 劉 永 鳳 助手 (汎アジア部門) に採用
1991. 5. 14 元教授 結城 令聞 名誉教授の称号授与
1991. 5. 14 元教授 板垣 雄三 名誉教授の称号授与
1991. 6. 16 助教授 加納 啓良 教授 (南アジア部門) に昇任
1991. 7. 1 助教授 鈴木 董 教授 (西アジア部門) に昇任
1992. 2. 29 助手 劉 永 鳳 退職
1992. 3. 31 教授 山田 三郎 停年退職 (汎アジア部門)
1992. 3. 31 教授 池田 温 停年退職 (東アジア部門 (第一))

1992. 4. 1 教授 松谷 敏雄 所長に併任
1992. 4. 1 松井 健 助教授（汎アジア部門）に採用
1992. 4. 1 助手 小島 毅 徳島大学講師に昇任
1992. 5. 19 元教授 山田 三郎 名誉教授の称号授与
1992. 5. 19 元教授 池田 温 名誉教授の称号授与
- (事務官)
1990. 4. 1 古山 学 東京大学技術官（遺跡調査室）前任技術専門職員 -学内発令-
1990. 4. 1 千代延恵正 東京大学技術官（遺跡調査室）技術専門職員 -学内発令-
1990. 10. 1 庶務掛 益子 一郎 庶務掛主任へ昇任
1990. 11. 30 会計掛 丸山 勉 勸奨退職
1991. 3. 31 業務掛長 中里富三郎 定年退職
1991. 4. 1 史料編纂所図書整理掛 鈴木 邦明 業務掛長に昇任
1991. 4. 1 会計掛長 斎藤 良雄 工学部経理課給与掛長に配置換
1991. 4. 1 生産技術研究所出納掛長 高野 胖 会計掛長に配置換
1991. 4. 1 調査掛研究協力主任 結城 剛吉 庶務掛国際交流主任に配置換
1991. 6. 1 図書第一掛長 中村 隆治 図書主任（図書第一掛長併任）に配置換
1992. 3. 31 図書主任 中村 隆治 定年退職
1992. 4. 1 総務主任 増田 仁吾 地震研究所会計主任に配置換
1992. 4. 1 教養学部経理課司計主任 下野 茂 総務主任に配置換
1992. 4. 1 附属図書館情報サービス課開架閲覧掛長 酒入 丈夫
図書主任（図書第一掛長併任）に配置換
1992. 6. 1 事務長 江澤 兵治 勸奨退職
1992. 6. 1 国立天文台庶務課長 石川 純男 事務長に配置換

IV 財 政 校費・科学研究費等

(1) 校 費

年度	決 算 額	年度	決 算 額	年度	決 算 額	年度	決 算 額
	千円		千円		千円		千円
1947	156	1959	9,315	1971	51,166	1983	210,931
1948	536	1960	9,293	1972	53,236	1984	145,350
1949	1,032	1961	15,474	1973	58,216	1985	142,534
1950	1,491	1962	13,960	1974	58,833	1986	151,085
1951	2,964	1963	15,158	1975	61,674	1987	147,045
1952	2,634	1964	22,218	1976	57,099	1988	149,924
1953	3,393	1965	20,652	1977	64,188	1989	149,695
1954	3,537	1966	34,655	1978	91,354	1990	157,971
1955	3,552	1967	34,409	1979	96,583	1991	146,600
1956	8,451	1968	42,375	1980	95,688		
1957	6,781	1969	34,226	1981	160,431		
1958	7,875	1970	31,187	1982	143,880		

(資料のつごうにより1947年度以降のみ掲載)

(2) 科学研究費補助金

1990年度

研究種目	交付決定額(千円)	件数
重点領域研究	32,900	3
総合研究(A)	2,700	1
奨励研究(A)萌	600	1
奨励研究(特)	2,900	3
	小計 39,100	
国際学術研究 (学術調査)	19,000	3
国際学術研究 (共同研究)	4,300	1
	小計 23,300	
合計	62,400千円	

1991年度

研究種目	交付決定額(千円)	件数
重点領域研究	2,900	1
総合研究(A)	5,500	2
奨励研究(特)	4,000	5
	小計 12,400	
国際学術研究 (学術調査)	20,500	4
国際学術研究 (共同研究)	3,500	1
	小計 24,000	
合計	36,400千円	

(3) 委任経理金

1990年度	三菱財団学術研究助成金	1,300千円 (2件)
1991年度	三菱財団学術研究助成金	12,100千円 (4件)
	池田研究助成金	300千円 (1件)
	合計	13,700千円

V 施 設

(1) 建 物

- 1941年11月26日 東京帝国大学附属図書館内に新設。
- 1949年1月22日 文京区大塚町56旧東方文化学院建物に移転。附属図書館内に分室をおく。
敷地面積 5,081.22m²
本館建物面積 3,012.5m² (内1,500m²程は外務省研修所が使用)
- 1965年10月 本郷構内新庁舎第1期工事完成により一部移転。
- 1967年3月 第2期工事完成によりさらに一部移転。
- 1968年 第3期工事完成により全面移転完了。
- 1982年 本所建物の増築が認められ、総合研究資料館庁舎との交換分合を行って、従来の合同庁舎の全館を使用することになる。
建物面積 6,577m²
- 1984年3月 全面改修工事完成により現在の姿になる。

本研究所の現在の建物は、上記略年表に見られる通り、1965年度に一部建築され、その後、2度に亘る増築、1回の大改修を経て、今日に至っている。いまこの建物のかかえるふたつの問題点——老朽化と狭隘化——について簡単に指摘しておきたい。

老朽化——建物本体は1965～68年間に、3次に亘って建てられた。当時の建材、中でもコンクリートの品質が著しく粗悪であったことから、老朽化が急速に進行している。その程度は、本学内の戦前の建物よりかえってひどく、これまで数度の雨漏り防止対策を繰返してきたが、屋上からの雨漏りは常態化している。また外壁面の劣化とヒビ割れは著しく、その影響から各階床面にまで、ヒビ割れが生じ、年々これが大きくなっていく段階である。8階書庫内に常時テントを張って図書を雨水から防御している。外壁面ヒビ割れからの雨水浸入による被害が2～4階の低層にも、屢々、及んでいる。抜本的には、改築以外、方法は無かろうと考えられる。

V 施 設

狭隘化——本研究所の図書保有数は1992年現在、約45万冊であり、今後も毎年1万冊弱増加すると予想される。本学研究所中随一の蔵書量であるが、内容的にも日本のみならず世界のアジア研究者の貴重な財産である。本所はこのため建物の全スペースの約 $\frac{1}{3}$ を書庫としているが、すでに満杯状態である。漢籍複本化計画も始まり、これの保管スペースも確保されねばならず、多数保有する貴重書専用コーナーの設置も急務である。対外サービス機関として附属東洋学文献センターが付設されているが、その専門書庫スペースも確保する必要がある。

本研究所は、国際共同研究が進展するにつれ、外国人研究員の受入れが急増しており、これら研究員の研究室不足が深刻化してきている。また本学全体の大学院重点化に即して、本所も大学院教育のより一層の本格化を検討中である。これらの問題に対処するためにも本所のスペース増は必須の課題である。

以上のように、本所の建物問題はきわめて深刻である。おそらく、現在敷地に、全面的改・増築することが唯一最良の策であろう。早急に対策の講ぜられるべき時機に立ち至っている。

(2) 防 災

本研究所には、自衛消防隊が組織されている。総務・連絡班、消防・救護班、施設・工作班、警備・誘導班、予備班の5班からなり、それぞれに担当が決められ、各班に班長と数人の班員が割り当てられている。また、地下1階から地上8階、書庫、屋上、車庫、自転車置場の13の区域を設定して、それぞれに防火担当責任者を決めている。各区域はさらに細分されて、火元責任者をおいて、防火と防災にあたっている。

VI 図書・資料

(1) 図書

本研究所は、アジア諸地域に関する図書を約45万冊、雑誌を約4,400種所蔵している。とくに漢籍は今日では収集不可能な貴重なものが多く、日本で有数のコレクションである。その他の分野の図書・雑誌も鋭意収集に努め、近年着実に増加している。それらは研究者に公開され、本研究所2階の閲覧室には毎年のべ約11,000名の閲覧者がある。なお、全学の電算化に対して、本研究所でも電算化に向けて鋭意努力中であるが、所蔵図書が漢籍、アラビア語、トルコ語、インドネシア語、サンスクリット語等多岐にわたり、担当人員も不足しているため必ずしも予定通りに進捗していない状況である。

本研究所蔵の図書・雑誌数は1992年4月1日現在、次のとおりである。

(但し整理中のものは含まない)

和・中・朝文図書	369,781冊	
欧文図書	78,364冊	計448,145冊
和文雑誌	1,719種	
朝文雑誌	255種	
中文雑誌	1,550種	
欧文雑誌	832種	計4,356種

このほか、マイクロフィルム4,800リール、マイクロ・フィッシュ約76,000シートを所蔵する。

主要所蔵図書

〔大木文庫〕 本研究所創設の当初に、大木幹一氏より中国法制関係書総数3,168部、45,452冊の寄贈を受けた。法律のみならず、政治、外交、経済、産

VI 図書・資料

業など研究上の貴重書が多く、明治以後の時期の研究にはとくに欠くことのできない蒐集資料である。いわゆる官箴の公牘の類の数百部は、本文庫のひとつの柱梁をなしている。『東京大学東洋文化研究所大本文庫分類目録』は1959年に旧蔵者の稿本にもとづき編纂、刊行された。

〔帝国学士院東亜諸民族調査室旧蔵書〕 1944年帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない、その蔵書の和漢洋書・雑誌・資料等2,000冊が移管された。このなかには西欧におけるアジア諸民族研究の主要な文献が集められている。

〔東方文化学院旧図書〕 東方文化学院東京研究所は、1929年に東方文化に関する研究機関として創設され、外務省の所管に属したが、1948年廃された。1967年3月、その旧蔵書と和漢洋あわせて103,587冊が本研究所に移管された。

〔松本忠雄氏旧蔵書〕 1949年度科学研究費補助金により松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書、雑誌など約3,000冊を購入した。これはとくに近代中国研究資料として重要なものを含んでいる。

〔長沢規矩也氏旧蔵書〕 1951・53両年度科学研究費補助金により、長沢規矩也氏旧蔵の約3,000冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類で、貴重書も少なくなく、中国文学研究上重要な資料である。1961年11月本研究所創立20年に当り、同氏から約150冊の補充を得るとともに、『雙紅堂文庫分類目録』を刊行した。

〔清野謙次氏旧蔵書〕 1952・53両年度科学研究費補助金により、清野謙次氏旧蔵洋書750冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする貴重なコレクションであり、1978年3月に『東京大学東洋文化研究所清野文庫分類目録』を刊行した。

〔矢吹慶輝氏旧蔵書〕 1952年度科学研究費補助金により、矢吹慶輝氏旧蔵洋書約360冊を購入した。英・仏・独のマニ教関係の文献がその中心をなし、他に仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

〔下中文庫〕 下中弥三郎氏より、1953年1月から1957年6月に至るまで、戦後出版の中国書4,500冊、中国雑誌10種及び戦後出版の東洋関係洋書130冊を寄贈を受けた。とくに中国書は当時入手できた書の主要なものをほとんど網羅

し、戦後の中国研究に関する重要な資料である。

〔東京銀行調査部旧蔵資料〕 1959・60両年度にわたり、東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和洋書・資料類約18,000冊の寄贈を受けた。

〔仁井田陞氏旧蔵書〕 本研究所名誉教授仁井田陞氏の逝去（1966年6月）後、所蔵の中国書5,000冊、洋書120冊、和書2,200冊、清代公私文書類900余点、50基の碑文の拓本を受け入れた。これらの図書資料は、大木文庫とともに旧中国の社会研究に極めて重要なものである。

〔我妻栄氏旧蔵資料〕 我妻栄氏の逝去（1973年10月）後、所蔵の和洋法学文献および各種資料が東京大学に寄贈された際、本研究所はとくにアジア法制関係文献資料総数647部932冊の寄贈を受けた。その目録は1982年3月『我妻栄先生旧蔵アジア法制関係文献資料目録』として刊行した。

〔倉石武四郎氏旧蔵書〕 1975年度に本学名誉教授倉石武四郎氏の漢籍を主とする蔵書を収蔵することとなり、1981年度までにその重要な部分、漢籍約4,300点などを購入した。

〔江上波夫氏旧蔵書〕 1981・82・84年度にわたり、本研究所名誉教授江上波夫氏の蔵書のうち、歴史学、民族学、考古学を中心とした洋書（露文を含む）の一部約2,550点を購入した。

〔Hans Daiber 氏旧蔵写本〕 1986・87両年度にわたり、東洋学文献センターと協力し、オランダの学者ハンス・ダイバー氏の収集した計367点の写本を購入した。主としてアラビア語によって書かれたもので、イスラームの宗教、思想、歴史に関する重要な資料である。1988年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber* を刊行した。

〔文淵閣本四庫全書影印本〕 1988年度に、文淵閣本四庫全書影印本全1,501冊を購入した。四庫全書は、清代以前の中国の古典的文献を網羅した最も基本的な叢書であり、現在、台北故宮博物院の所蔵するところとなっている文淵本原本は、北京紫禁城内に置かれていた正本をなす。今回購入したその全体の影印本は、中国研究上不可欠の重要性をもっており、当研究所に整備することに

VI 図書・資料

よって、中国研究の一層の発展が期待される。

〔オランダ植民地省公文書索引およびジャワ官報〕 1989年度に、マイクロフィッシュ化された資料一式を購入した。「植民地省公文書索引」は、オランダの国立公文書館所蔵の旧植民地省文書（1850～1921年）の、手書きの索引書数百巻分を網羅したものであり、「ジャワ官報」は、インドネシアにおけるオランダ植民地政府が1828～1939年の期間に公布した官報の集成である。

〔乾隆版大蔵経〕 1990年度に乾隆版大蔵経・全724函（毎函10冊）、大清三蔵聖教目録・一函（5冊）を購入した。中国・北京、文物出版社、1989年刊。乾隆版大蔵経は雍正11（1733）年に開刻し、乾隆3（1738）年に完成した中国最後の木版大蔵経である。経・律・論の三蔵と雑蔵の四分よりなり、1657部の仏教典籍が収録されている。明の北蔵の系統をひき、今日、漢文の大蔵経で経版木が保存されているものは、高麗蔵とこの乾隆版のみであり、きわめて貴重な資料である。

〔Ouseley Collection〕 19世紀初めのイギリスの外交官であり東洋学者でもあったG. Ouseley 卿（1774-1844）の旧蔵書の一部。17世紀から19世紀にかけてのヨーロッパ人のインド、中近東への旅行記とペルシア文学作品を主とした60点、全106冊からなる。当時の建築や社会生活を描写した美しいグラビュールを含む書物が多い点、Ouseley 自身による書き込みが随所に見られる点などから極めて資料的価値が高いと言える。

以上の各コレクションのほか、1958年度から3カ年にわたって文部省科学研究費により、総合研究「アジア地域の社会・経済構造」の一環として、その資料（主として洋書）1,800冊を購入し、さらに1961年度から1965年度まで機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」において、継続して資料の蒐集に努め、総数4,771冊に達した。

(2) 資 料

本研究所の収蔵する諸種の資料のうち、重要なものを以下に掲げる。

〔殷代甲骨〕 本研究所蔵甲骨は、次の三部分から成る。第一は、故河井仙郎氏旧蔵の1,708片で、これは1979年に現蔵者井上富美子氏より寄贈された。第二は故田中慶太郎氏旧蔵の393片で、これは1979年に購入した。第三は、旧蔵者三浦清吾氏より寄贈された2片である。合計2,103片に達し、京都大学人文科学研究所に次ぐ、わが国有数の蒐集である。これは、整理・綴合の上、松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』（東洋文化研究所報告1983年）として刊行された。考釈篇は続刊の予定である。

〔中国歴史古銭・銭范〕 旧東方文化学院の蒐集品で、殷代の貝貨、戦国時代の布銭・刀銭・郢爰からはじまり、歴代の代表的貨幣を収蔵する。約1,250点の古銭と、10点の銭の范模を含んでいる。現在、整理中である。

〔中国考古資料〕 上記の殷墟出土甲骨片、古銭以外に、瓦当約110点があり、また鏡、戈、戟、鏃、など青銅器、玉器、土器、磚、磚製買地券、壁画片、俑、仏像、衣服、室内装飾品、土俗品がある。その大部分は旧東方文化学院が購入し、本研究所に移管されたものである。

〔中国絵画資料（原版・焼付写真・カラスライド等）〕 米国、カナダ、欧州諸国、東南アジア諸国の美術館、個人蒐集家が所蔵する中国絵画および日本に現存している中国絵画に関するものが主体となっており、その他に米国ミシガン大学アーカイヴより購入した中国絵画の焼付写真、東京国立文化財研究所原版からの焼付写真等があって、現在約10万点にのぼり、中国絵画に関する写真資料の蒐集としては世界有数の質量を備えている。これらの資料については、「東洋学文献センター叢刊」として5冊の目録が1977～83年に刊行され、また図録は『中国絵画総合図録』（全5巻）として東京大学出版会より1982～83年に刊行された。

〔中国清代・民国期の文書資料〕 17・18世紀より20世紀に及ぶ、北京をはじめ嘉興、武進、蘇州、通州、宝応、鳳山などにおける土地文書を中心とし、そ

VI 図書・資料

の他公私文書類約二千数百点を所蔵している。仁井田陞名誉教授旧蔵遺贈分や旧東亜研究所収集文書等を含む。現在東アジア部門の歴史・経済・政治関係者が所外の研究者と協力して整理中であり、その目録と一部の内容は、1983～86年に『東洋文化研究所所蔵中国土地文書目録・解説（上）（下）』（東洋学文献センター叢刊）として刊行された。

〔内蒙古出土学術資料〕 本研究所名誉教授江上波夫氏が戦前に内蒙古で発掘・採集された資料約1万点が1983年度に寄贈された。これらは主として土器片・陶器片などであり、今日では入手しがたい貴重な資料である。これらの資料の一部は氏のいくつかの論文に掲載されているが、他の圧倒的多数は未発表のものであって、将来の公刊が望まれる。

〔中世インド・イスラム史蹟調査関係資料〕 デリーおよびインド各地に現存するいわゆるサルタナット時代のムスリム遺跡に関する資料で、各種サイズの写真、実測図などが主なものである。これらの資料は1959～62年度に「東京大学インド史蹟調査団」が実施した2回にわたる現地調査の成果の一部で、とくにニューデリーとその周辺地域の建造物は、今日消滅してしまったものが多くそれらについての資料は、諸外国には見られない貴重な資料である。

〔西アジア考古資料〕 人類文明の起源、東アジアおよび日本古代文明の源流としての古代イラン文明の研究を目的として、1956年以来、「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」がイラン・イラク両国における遺跡14箇所を発掘・調査の結果収集したものである。その数は数万点に達し、これらはここ10年来各国が遺物の分与、流出を厳禁している今日では甚だ貴重な資料である。特にその大部分は発掘品で、考古学上第一級資料である。

VII 電算化の進展状況

本研究所における電算化は、1970年代より進行し、現在パーソナル・コンピュータ45台、ワークステーションIBM-7012-320型1台が、配置されている。これらのパソコンとワークステーションは、東京大学UTNETを通じて、全学につながっている。

現在ほとんどの部門で、電算機を重要な手段とする研究が進んでいる。汎アジア部門では、アジア農業統計の分析や、東アジア・日本の政治動向のシュミレーションが行われ、東アジア部門では、世界各地に所在する中国絵画の検索目録の作成や道教文献の集成が進み、南アジア部門では南アジア文献検索目録の作成、インド古典文献のデータベース化、インド村落台帳の分析、インドネシア村落調査の集計などで、大量データの電算機による処理が行われ、すでにいくつかのデータベースが作成されている。また、本所西アジア部門が中核となって組織した文部省科学研究費重点領域研究「イスラームの都市性の総合的研究」においては、研究者の組織化と運営、研究成果の刊行などの全過程において、電算機が中心的役割を果たし、新たな研究組織運営方法が試行された。

本研究所の蔵書は、アジア諸地域の言語による文献が中心をなしているため、現時点ではそれをすべて電算化することには大きな困難があるが、学術情報センターのネットワークに参加して、ヨーロッパ言語や日本語文献を中心にして図書目録を入力しているほか、研究者のために文献所在情報検索を行っている。さらに、アラビア語文献についても、目録の入力の準備を行っている。

また、附属東洋学文献センターでは、中国書・その他のアジア言語文献について目録編纂作業の電算化を進めているほか、班研究「アジア研究資料の収集及びデータベースの作成」の応援を得てアジア研究資料のデータベース化を計画している。

VIII 研究活動

A 部門研究

汎アジア部門

末成 道男 (1990年8月より) 関本 照夫 福嶋 真人
山田 三郎 (1992年3月まで) 原 洋之介
劉 永 鳳 (1991年4月より1992年2月まで)
猪口 孝 田中 明彦
友杉 孝 松井 健 (1992年4月より) 岡本 サエ

汎アジア部門はアジアという対象を、文化人類学・経済学・政治学・人文地理学・比較思想という社会科学・人文科学の広い分野にわたり、個別専門分野並びに学際領域の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。この部門では日本も重要な研究対象としている。

文化人類学研究分野は、アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし、ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの方法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて、下からあるいは周縁から、よりマクロな社会の全体像を見透そうとしている。

末成は、日本・韓国・台湾・中国大陸における村落の社会人類学的な現地調査にもとづき、家族、親族を中心とする人間関係の特質を祖先祭祀や廟における祭祀活動を通して研究してきた。こうしたミクロな場での観察資料に加え、様々の記録資料を利用することにより、歴史学の研究とどのような相互協力関係が可能なのかを追究することにも強い関心を持っている。

関本は、インドネシアでの現地調査にもとづき、村落社会を律する社会関係の特質、さらに権威やヒエラルキーを支える観念と行為の特質を明らかにせんとしてきた。現在はさらに、東南アジア諸地域の政治体系と文化との係わりを、過去の王権と現代の国民国家の両面から研究している。

福嶋は、同じくインドネシアでの調査にもとづき、制度的中心に対立するイスラムの運動や農民の抵抗運動を研究し、言語秩序と政治的・宗教的ヒエラルキーとの係わりを追求している。

経済・統計研究分野は、アジア諸国経済発展の実証的な比較研究を行っており、この研究を通じて、アジア諸国経済発展のアジア域内及び世界における国際的位置づけを明かにするとともに、欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。

山田は、特にアジア諸国農業発展の比較分析を行い、生産性・生産構造等の変化の実証分析を通じて、ヨーロッパその他の農業発展との対比の中で、国際的視野からアジアの農業発展についての分析を進めた。

原は、東南アジアに重点をおいて研究を進めており、同地域諸国における国民経済の形成を、タイ・インドネシア・フィリピン・ビルマの比較研究を通じて分析し、更に、東アジアや南アジアとの比較により、アジア経済の中での東南アジア経済の位置と特徴を明らかにするべく研究を進めている。

劉は、アジアの農業開発問題の計量的実証分析を進めてきた。特に第二次大戦後における韓国農業の成長過程を研究対象とし、韓国の経済成長・技術変化との関係を、日本農業との比較及び国際比較によって究明してきた。

国際政治研究分野はアジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的に行っている。

猪口は、国際も国内も、政治も経済も総合した視点で日本を中心とした主として東アジアの国内・国際政治の研究を行ってきている。第一に、日本の対外政策を中心としたもので、英文書 *The Political Economy of Japan: The Changing International Context* (Stanford University Press, 1988, coedited with Daniel Okimoto) を刊行した。

VIII 研究活動

第二に、東アジアの国家と社会の比較研究である。その理論枠組みとして『国家と社会』（「現代政治学叢書」の第1巻でもある）を1988年に刊行した。中国版は1989年に経済日報出版社から刊行された。中間報告は「比較政治体制論—東アジアと日本」として政治学学術誌『レヴァイアサン』1988年秋季号で特集発表した。さらに、『現代日本の国家と社会』の刊行を「東アジアの国家と社会」叢書（全6巻、東京大学出版会）として準備を進めている。

田中は、世界システム全体の動向との関連で東アジアの国際政治を研究してきている。第一に、世界システム全体の変化を理論的に検討しており、これまで政治と経済の関係を中心に研究を進めてきたが、今後は、とりわけ政治・経済の変化と技術および思想の変化がどのように関連しているかを重点に研究を進める予定である。第二に、現代の東アジアにおける主要国間の国際政治を理論的・実証的に分析している。重点は、日米中三国間の政治・経済関係にいかなる政治的パターンが存在するかの検討であり、日中関係および日米関係に関しては幾つかの試論的研究を行った。

人文地理学研究分野はアジア諸地域の記述、フィールド・ワークに基づく社会の全体像を描く。このような作業によって、あまりにも合理的あるいは機能的な現代世界の相対化を目指す。したがって、狭く人文地理の枠に限定されることなく、むしろ広く隣接諸科学に参与する、脱領域の研究である。人文地理においては、限定された分野の精細な分析的研究は、同時に広く社会の全体像に収斂せねばならない。

友杉は、これまで行ってきたタイ農村社会の研究にくわえて、スリランカの一地方都市ゴールについて記述した。都市景観を手がかりにして、商業、社会統合、祭祀などが未分化のまま、あるいは相互に複雑に関与してつくる多様な意味の世界と現実世界の統一的な描写がもとめられている。このようなゴールの記述はこの都市の歴史的個性の把握の試みでもある。ゴールでの試みをふまえて、ヨーロッパ都市の研究蓄積を参照しつつ、アジア諸都市の都市比較類型論が志向される。

松井は、認識人類学を手がかりにして、文化記述のための方法について、そ

の学説史的背景を考慮しつつ、新しい展開を摸索してきた。同時に、アフガニスタン、パキスタンのバルーチスタン、インドのラージャスタンといった西南アジアの乾燥地帯での調査を重ねつつ、具体的な地域研究のなかで理論研究の深化をめざしている。

比較思想研究分野は東アジアの思想交流の中にみられる、漢字文化圏の諸民族の思惟的特徴を研究する。

岡本は、前近代の中国精神史を比較思想の視角から研究している。この主題へのアプローチとして、第一に、清代禁書の総合的研究により明末清初の漢人文化が満人王朝の下でいかなる変遷を遂げたかを解明し、第二に、中西文化交流における中国人の対応と文化摩擦について欧文資料と漢籍から系統的に追跡している。今後は乾隆禁書の研究を継続すると同時に、中国文人の比較思想史、さらにヨーロッパと東アジアの文化交流等のテーマへと研究を進める予定である。

東アジア部門（第一）

松丸 道雄 高嶋 謙一（1990年8月まで）

池田 温（1992年3月まで） 宮嶋 博史

斯波 義信（1991年3月まで） 小島 毅（1992年3月まで）

濱下 武志 川村 康

東アジア第一部門は、中国、朝鮮、日本、ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ、社会科学、歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を適確に把握することを目標とする。この研究では、とくに東アジア第二部門と協力して、学際的な地域研究による生きた全体像の把握をめざすことはいうまでもない。研究分野としては、経済・社会、政治過程、歴史、考古を包含し、「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として、共同研究を継続している。この部門では、「殷周社会の総合的研究」「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」「朝鮮における社会変動と民衆」の

VIII 研究活動

3つの研究班を組織し、本学内外の協力を得て継続して研究をすすめている。

時代順に述べれば、考古学、古代史学の分野では、松丸は、本研究所蔵の甲骨資料の整理分析を行い、甲骨を綴合・分類し、2,103片の写真と拓本を『甲骨文字 図版編』として刊行し、その釈文の作成と研究にあたっている。また国内外の殷周青銅器を実物について調査し、近年までに蒐集した金文の写真資料のうち殷・西周のもの分類目録を刊行した。これらの基礎的作業を通じて、甲骨・金文の解釈や偽作問題につき新見解を公表し、その成果にもとづいて殷周時代の国家・社会構造や精神構造を考究している。

高嶋は、歴史言語学的観点より殷・周時代の言語及び文化構造の究明を志し、その側面として甲骨文に於ける否定詞や繫辞などの体系的解釈に努力した。文化的側面としては、殷代の「卜い」の際に用いられた言語の性質について論考を著した。

池田は、中国古代・中世史と東アジア前近代の文化交流史を研究し、唐代に至る現存籍帳を集めて検討考察し、『中国古代籍帳研究』を刊行した。また班研究の成果として「東洋文化」に東亜古代国制試探を特集し、他方、仁井田陞『唐令拾遺』の補訂のため編纂の作業を進めた。なお、笹山晴生を代表とする『続日本紀』の注釈の共同研究にも中国文献との関連の面から協力した。

斯波は、宋元明中国の社会経済史並びに地域社会史の研究を進めており、『宋代江南経済史の研究』を刊行した。華人移住史に関しては、長崎・函館・香港・台湾・オーストラリアなどの現地調査をも行った。その成果の一部に『函館華僑関係資料集』などがある。また、都市史の分野では、都鄙構造を究明すべく、1930年代の寧波地区の詳細な諸統計を分析した。

小島は、皇帝制秩序が維持された思想的基盤を宋代を中心に研究した。具体的には「天」に関する言説やこれに関連する「郊祀」儀礼を分析し、宋学の政治論などにおいて、王朝の統合原理がどのように理論化されていたかを解明すべく努力した。

川村は、中国法制史を専攻し、宋代を中心として研究を進めている。とくに家族法領域では判語史料の分析を通じて、成文法史料からだけでは解明しえな

い現実の法慣行の探究に努め、刑罰法領域では唐律的五刑と、杖刑を中心とした宋代の刑罰体系との関係およびその移行の過程、ならびに宋代における律の役割の解明を課題としている。

濱下は、19世紀を中心とする中国と欧米の経済関係の研究に従事し、海関資料・領事報告・中外の商工会議所報告などにもとづき、貿易および金融問題の研究を進め『中国近代経済史研究—清末海関財政と開港場市場圏』・『山西票号資料・書簡篇』(1)を刊行した。これに関連して、華人資本の海外活動の究明のため、香港・シンガポールなどで金融機関・商会の現地調査を実施した。

宮嶋は、朝鮮近代史を専攻し、土地調査事業を中心とした社会経済史の研究を進めている。土地調査事業と前後して国家の土地把握方式がどのように変化したのかを、各種土地台帳の分析を通じて追求し、その成果を研究所の東文研報告『朝鮮土地調査事業史の研究』として刊行した。また、韓国の研究者と協力して、植民地期の水利組合関係の資料の発掘・分析にも努力している。

東アジア部門 (第二)

蜂屋 邦夫 丘山 新
田仲 一成 丸尾 常喜 山之内正彦
戸田 禎佑 小川 裕充 林 秀 薇

東アジア第二部門は、中国を中心とする東アジア地域の思想、宗教、美術を研究対象とする部門で、とくに「庶民文化の形成と展開」を研究課題として、各分野にわたって総合的に研究することを目的としている。

一般的に中国では、権力エリートと文化エリートは分離せずに癒着しており、したがって権力エリートは文化を独占して、庶民は非文化的階層とみなされてきた。庶民は文化の獲得の努力を繰り返して行い、権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは非正統的な文化とみなされ、同時に強く意識されなかったにせよ、そこには反権力的な指向をもっていた。これは中国文化のひとつの特質といえようが、その状況はかなり複雑である。「庶

VIII 研究活動

民文化」は六朝期から唐末までに形成され、宋元以後にはめざましく発展し各地方に広がっていたと考えられる。この課題に対して、各研究分野で独自の問題の検討を通じて考究し、共同して中国文化の特質の解明をめざしている。以下各分野の研究について述べる。

宗教・思想研究分野では、蜂屋は、思想の内在的理解のため文献の正確な読解に努めながら、とくに東晋時代の思想を検討した。また、『儀禮疏』の研究を推進し、「士冠疏」三巻「士昏疏」三巻の訳注を完成しこれを刊行した。さらに全真教などの道教の思想について考察し、現地における実情の研究にも着手して、陝西省・四川省などにおける道教の現状について、報告書『中国道教の現状——道士・道協・道観』（本文冊・図版冊）を刊行し、ひきつづき現地調査を遂行している。一方、12世紀における全真教発祥の問題を研究し、東文研報告『金代道教の研究——王重陽と馬丹陽』を公刊した。

丘山は、中国における仏教經典の翻訳とその受容に関する研究をすすめている。翻訳については、漢訳本をサンスクリット本・パーリ本・チベット訳本などと対照し、漢訳仏典の語彙・語法的特徴を解明しつつある。それらは、『長阿含經・訳注』として刊行される予定である。また、漢訳仏典の受容に関しては、インド・西域伝来の各經典がどのような関心から中国に受容されていったかという視点から、中国六朝期の時代思潮を探ろうと試みている。

次に文学の分野では、古来、稗官小説流として蔑視された民間文学はエリートの正統文学に対立して存在していたが、六朝期以後、説話・歌謡などのジャンルを分岐させつつ、権力批判的指向の強い文学を形成していた。この流れは唐宋以後、質的には正統文学をむしろ凌ぐ勢いで、戯曲・小説を展開させ、近世初期から近代に至る。文学研究分野ではこの展開過程を考察することを課題としている。

田仲は、中国の地方演劇史を研究し、宋元より明清に至る地方演劇の記録を詳細に調べ、中国の祭祀演劇の歴史を構成しようとする。とくにこの数年来、香港、台湾、シンガポール、マレーシアなどに見られる華南（閩粵）系演劇の調査を連続して行い、文献資料との関連を考察している。また閩粵社会全体に

視野を広げる必要から、他分野の専門家の協力を得て『華南の地域社会と地方文学』について総合的な検討を試みている。

丸尾は、中国現代文学を研究し、とくに魯迅における個と民族の連関に着目しつつ、その文学および思想の形成・展開の跡を通時的に追究する一方で、個別な作品論を積み重ねているが、近年はその文学に表れる「鬼」の表象に注目し、魯迅文学における伝統と近代の接点の内在的な解明を試みている。ほかに中国小説の歴史的考察をすすめている。

山之内は、李商隱を中心として中国晩唐詩人の抒情の構造を時代的背景との関連に注目しつつ研究している。また、所外の学徒とともに、唐詩に現われる植物関係語彙の採集・分析を行っている。

美術研究分野では、長年にわたって国内や欧米など諸外国に現存する中国絵画を調査し、その写真史料を蒐集してきた。それらの目録と図録とを既に刊行したので、現在はその補足調査を継続している。また、既に刊行済みの上記作品目録をデータ・ベース化して、個々の作品の画像処理をも含めた中国絵画研究資料システムを構築する準備を進めている。戸田・小川・林の3名は、これらの基礎的作業を共同して行う一方、戸田は、宋元の羅漢十王図を中心とする仏画と元代道釈画とを研究し、小川は、唐宋時代から元代の山水画を主な研究対象としている。また、林は、宋元時代の水墨系の道釈画の系統的分類を行いつつ、宋元絵画に表われた庶民的要素の意義を人物画・山水画の両面から考察している。

南アジア部門

柳澤 悠 加納 啓良

上村 勝彦 永ノ尾信悟（1991年4月より） 小倉 泰

南アジア部門は、東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人びとが複雑な社会を形成したうえ、欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て、戦後にあいついで

VIII 研究活動

独立した諸国からなる地域であるので、今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため、本部門は政治・経済・社会・文化などにわたって過去現在の両者を総合的に研究している。

本部門では、とくに「南アジアの伝統と社会変動」を課題として研究を進めてきた。このため、所外の研究者の協力を得て研究班を組織し、それぞれ新しい角度から問題を提起し、それについて実証的かつ理論的に検討を行っている。

経済研究分野では、南アジアに関して、柳澤は、19世紀以降の南インド農村の土地税関係文書など政府公文書を収集して分析するほか、南インドの一つの郡の約60の村落の土地査定台帳を電算機を使って分析した。その分析に基づき、村落調査を行って、19世紀から20世紀後半に至るまでの時期の農村社会の構造的変化を、土地所有、農業労働者やカーストの変動に注目して検討し、その成果を東文研報告『南インド社会経済史研究』として刊行した。また、南インドの在来手工業とくに手織業に注目して、カーストなど社会関係の変容が、工業品への需要にいかに関与したかを検討している。これらと関連して、グジャラート州の農村調査を行い、南インドとの比較検討を行っている。

東南アジアに関しては、加納は、インドネシアの経済を研究し、1987～88年度に現地で実施したジャワ農村の土地所有、農業労働、労働移動等に関する再調査の成果を整理、分析するとともに、オランダとインドネシアの双方で収集した資料により、19世紀以降のインドネシアの経済史の研究をも進めている。また1990年度からは、オランダ、インドネシア両国の研究者と協力して、ジャワの北海岸地域の一地方の過去1世紀間の社会経済変化に関する国際共同研究プロジェクトを推進している。

宗教・文化の分野では、上村は、詩論書の研究を続けるとともに、カウティリヤの実利論を継承した後代の政治論書である『カーマングキー・ニーティラーサ』、『シュクラ・ニーティ』など、及び、叙事詩『マハーバーラタ』と、それに含まれる『バガヴァッド・ギーター』を研究している。

永ノ尾は、古代インドのヴェーダ祭式研究を中心に研究を行っている。

ヴェーダ祭式の文献学的研究については、すでに多くのドイツ語による論文を
発表したが、文献研究とともに、インドのビハール州北部ミティラー地方の農
村を数回訪問し、現在のバラモン達の宗教儀礼の実際の在り方を調査して、そ
の結果を文献と照合して研究した。目下、『マハーバーラタ』を中心に、聖地
巡礼に関する研究をも行っている。

小倉は、ヒンドゥー寺院建築の象徴性の問題をテーマとして、特に南インド
の寺院に関して研究を行っている。一方で、祭式の綱要書であるアーガマ文献
群に記述された儀礼に注目して、寺院を建築する行為の背景にある宗教的意味
について考察するとともに、建築職人の手引き書であるヴァーストゥシャース
トラと呼ばれる文献群の規定がいかなる程度まで実際の建築に適用されたか
について、設計技法を中心に分析している。

西アジア部門

板垣 雄三 (1991年3月まで) 鈴木 董
松谷 敏雄 羽田 正
後藤 明 鎌田 繁 林 佳世子

西アジア部門は、アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域、いわゆ
る中近東を研究対象とし、あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。こ
の地域の遠い過去から現在に及ぶ複雑な文化と社会を学際的研究によって把握
することが本部門の目標である。

西アジア地域は、古代文明の発祥の地として、またその後の長い歴史過程に
おける東西文化交流の結節点として、世界史上に重要な位置を占めてきた。同
時に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という一神教の主要な伝統を生んだ
地である。とくにイスラム教はこの地域を根幹とし、広く諸地域に滲透して多
大な影響を及ぼしている。したがって、現在の世界の政治、経済、社会、文化
にかかわる多角的な諸問題は、国際的見地からみても、とりわけ西アジア地域
に集約的に現れているのである。本部門では以上の諸問題をいくつかの専門分

VIII 研究活動

野で共同して研究している。

経済・政治の分野には、鈴木が所属し、板垣が1991年3月まで所属していた。

板垣は、アラブ近代史に関して従来行ってきた研究を踏まえつつ、現代中東の政府・社会変動の機構を解明しようとする作業に従事してきた。そこでは、政治過程に作用する当該地域諸社会の集団編成原理ならびに価値意識の変化を重視し、また国際関係と社会過程との間の構造的連関に着目しながら、パレスティナの大衆運動、イスラム復興運動などの展開、リビアの政治動向などについて考察した。なお、文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」の領域代表者として研究プロジェクトを総括してきた。

鈴木は、オスマン帝国史を専攻し、政治学的視点から帝国の政治・社会体制を研究した。とくに前近代における高級官人の変遷過程を分析して、軍事・行政制度と高級官人を輩出する階層の変容の実態を明らかにするとともに、実務官人層の出現とその役割を論じた。また国際政治学の視点から、現代西アジアにおけるアイデンティティの変容と国際紛争について若干の考察を行っている。さらに、オスマン帝国の帝都イスタンブールの政治社会史的位置づけについて考察した。

次に、歴史・考古の分野には松谷と羽田が所属している。松谷は、西アジアにおける農耕・牧畜という食料生産経済の開始に関して研究をしている。これは、1956年より本研究所が主宰してきた「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」の現地研究を引き継ぐものであり、両国における発掘調査をふまえ、近年の国際情勢の変化に伴い、イラクに隣接するシリアにフィールドを移し、実証的に考究しようとするものである。

羽田は、イスラム期イラン史において、トルコ・モンゴル系遊牧部族が果たした役割に注目し、彼らのイラン社会に与えた影響を分析してきた。また、政治・社会・文化の三方向から前近代イラン・イスラム世界の特徴を明らかにし、これをイスラム世界史の中に正しく位置付けることを試みている。さらに海外現地調査によって、広くイスラム世界全域における宗教建築の建築史的研究を開始した。

宗教・文化の分野には、後藤、鎌田、林が所属している。後藤は、従来行ってきたムハンマド伝の研究およびムハマンド時代のアラブ社会・文化の研究をふまえて、それを発展させ、一方でイスラームの思想の枠組みが形成されてきた過程を歴史的に分析することを試みた。また、7世紀メッカを例にとりながら「イスラーム自由都市論」の構築を試みてきた。

鎌田は、イスラームの宗教思想研究に携わりイスラームの伝統的思想家の思索の枠組を把握しその特質を明らかにすることを目指している。イラン・シーア派（十二イマーム派）の神秘主義的哲学者モッラー・サドラー及び彼につらなる思想家の靈魂観、世界観、イマーム論を明らかにしようと努めている。

林は、イスラーム都市社会史を専攻し、オスマン朝期のイスタンブルを対象として、その社会構造に関する研究を行っている。とくにワクフの問題に着目し、関連史料の基礎的研究を行うとともに、イスラーム都市形成に果たしたワクフ制度の役割について考察を進めている。

1991年度研究計画

汎アジア部門 アジア諸地域における社会・文化の変容過程

I. アジア諸社会の固有文化とその変容

1. 末成 道男 東アジア社会の変容過程
2. 関本 照夫 インドネシア社会の統合過程
3. 福嶋 真人 東南アジアにおける言語・権力・宗教の研究

II. アジア諸国経済発展の比較研究

4. 山田 三郎 アジア農業発展の国際比較
5. 原 洋之介 アジア諸国の工業化と国際貿易
6. 劉 永 鳳 アジア経済成長と農業開発

III. アジアにおける政治変動と国際関係

7. 猪口 孝 西太平洋諸国における政治経済変動と国際政治経済
8. 田中 明彦 東アジアをめぐる主要国間の国際政治

IV. アジアにおける都市と農村

9. 友杉 孝 日本とタイとスリランカの比較研究

V. アジアにおける思想・文化の比較研究

10. 岡本 サエ 東アジアの比較思想

東アジア部門

I. 東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1. 松丸 道雄 中国古代国家の形成
2. 池田 温 東アジア前近代国制の比較史
3. 小島 毅 唐宋時代の皇帝制秩序
4. 川村 康 唐宋時代の法制度
5. 濱下 武志 中国近代の経済発展
6. 宮脇 博史 近代朝鮮の社会経済構造

II. 東アジアにおける庶民文化の形成と展開

- | | | |
|-----|-------|--------------------|
| 7. | 蜂屋 邦夫 | 庶民における三教思想の受容 |
| 8. | 丘山 新 | 仏教經典の民衆化 |
| 9. | 田仲 一成 | 明清の地方劇 |
| 10. | 丸尾 常喜 | 中国近代文学における民衆文化の諸問題 |
| 11. | 山之内正彦 | 明清の歌謡 |
| 12. | 戸田 禎佑 | 宋元の民間画工 |
| 13. | 小川 裕充 | 明清の職業画家 |
| 14. | 林 秀 薇 | 宋元の道釈画 |

南アジア部門 南アジアにおける支配体制と社会構造

- | | | |
|----|-------|----------------------|
| 1. | 上村 勝彦 | 古代インドの文学と社会 |
| 2. | 永ノ尾信悟 | 古代インド社会と祭式 |
| 3. | 小倉 泰 | 中世インド寺院と社会 |
| 4. | 柳澤 悠 | 近現代インドの経済構造 |
| 5. | 加納 啓良 | インドネシアにおける植民地支配と農業問題 |
| 6. | 山田 三郎 | 東南アジア農業社会の比較研究 |
| 7. | 原 洋之介 | 東南アジアの支配体制と経済発展 |

西アジア部門 西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

- | | | |
|----|-------|----------------------|
| 1. | 鈴木 董 | オスマン帝国の政治社会史的研究 |
| 2. | 松谷 敏雄 | 北シリアにおける農耕・牧畜の起源について |
| 3. | 羽田 正 | イラン・イスラム社会の特徴 |
| 4. | 後藤 明 | 初期イスラム社会史 |
| 5. | 鎌田 繁 | イスラム神秘思想の構造と展開 |
| 6. | 林 佳世子 | オスマン朝都市研究 |

1992年度研究計画

汎アジア部門 アジア諸地域における社会・文化の変容過程

I. アジア諸社会の固有文化とその変容

1. 末成 道男 東アジア社会の変容過程
2. 関本 照夫 インドネシア社会の統合過程
3. 福嶋 真人 東南アジアにおける言語・権力・宗教の研究

II. アジア諸国経済発展の比較研究

4. 原 洋之介 アジア諸国の工業化と国際貿易

III. アジアにおける政治変動と国際関係

5. 猪口 孝 西太平洋諸国における政治経済変動と国際政治経済
6. 田中 明彦 東アジアをめぐる主要国間の国際政治

IV. アジアにおける都市と農村

7. 友杉 孝 日本とタイとスリランカの比較研究
8. 松井 健 西南アジアの都市と遊牧民

V. アジアにおける思想・文化の比較研究

9. 岡本 サエ 東アジアの比較思想

東アジア部門

I. 東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1. 松丸 道雄 中国古代国家の形成
2. 川村 康 唐宋時代の法制度
3. 濱下 武志 中国近代の経済発展
4. 宮脇 博史 近代朝鮮の社会経済構造

II. 東アジアにおける庶民文化の形成と展開

5. 蜂屋 邦夫 庶民における三教思想の受容
6. 丘山 新 仏教経典の民衆化
7. 田仲 一成 明清の地方劇

- 8. 丸尾 常喜 中国近代文学における民衆文化の諸問題
- 9. 山之内正彦 明清の歌謡
- 10. 戸田 禎佑 宋元の民間画工
- 11. 小川 裕充 明清の職業画家
- 12. 林 秀 薇 宋元の道釈画

南アジア部門 南アジアにおける支配体制と社会構造

- 1. 上村 勝彦 古代インドの文学と社会
- 2. 永ノ尾信悟 古代インド社会と祭式
- 3. 小倉 泰 中世インド寺院と社会
- 4. 柳澤 悠 近現代インドの経済構造
- 5. 加納 啓良 インドネシアにおける植民地支配と農業問題
- 6. 原 洋之介 東南アジアの支配体制と経済発展

西アジア部門 西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

- 1. 鈴木 董 オスマン帝国の政治社会史的研究
- 2. 松谷 敏雄 北シリアにおける農耕・牧畜の起源について
- 3. 羽田 正 イラン・イスラム社会の特徴
- 4. 後藤 明 初期イスラム社会史
- 5. 鎌田 繁 イスラム神秘思想の構造と展開
- 6. 林 佳世子 オスマン朝都市研究

B 班研究

1991年度研究計画

東アジア研究における人類学と歴史学の接点 主任 末成

1. 宮永 國子 日本・宗教人類学
2. 末成 道男 韓国・社会人類学
3. 王 崧 興 台湾・社会人類学
4. 瀬川 昌久 香港・文化人類学
5. 桐本 東太 中国・社会史
6. 上田 信 中国・社会史

アジア諸社会における文化像の生産と消費 主任 関本

1. 関本 照夫 集団と文化の自己主張
2. 福嶋 真人 マスメディア
3. 船曳 建夫 演劇
4. 山下 晋司 観光
5. 中村 雄祐 大衆音楽
6. 内堀 基光 神話の再生産
7. 落合 一泰 写真
8. 富沢 寿勇 文化政策
9. 葛野 浩昭 少数民族の位置
10. 塩田 光喜 口承芸能

アジア農村の現地研究の方法と過程 主任 友杉

1. 宮口 侗廸 山村の構造－日本－
2. 友杉 孝 むらと水利－タイ－

- 3. 堀井 健三 米作農村と土地所有－マレーシア－
- 4. 菱口 善美 村落と農業－インド，バングラデシュ－
- 5. 中村 尚司 共同体と水利－スリランカー－
- 6. 後藤 晃 灌漑農業論－西アジア－

構造調整下のアジア経済の展望

主任 山田

- 1. 山田 三郎 構造調整と経済発展
- 2. 原 洋之介 構造調整と国際経済
- 3. 杉本 義行 構造調整と国際貿易
- 4. 今岡日出紀 構造調整とマクロ経済
- 5. 藤田 夏樹 構造調整と産業構造
- 6. 新谷 正彦 構造調整と技術変化
- 7. 永田 信 構造調整と資源保全
- 8. 福井 清一 構造調整と農村経済
- 9. 石田 正昭 構造調整と農業成長
- 10. 本台 進 構造調整と産業組織
- 11. 田島 俊雄 構造調整と中国経済
- 12. 劉 永 鳳 構造調整と韓国経済

東アジアの国家と社会

主任 猪口

- 1. 猪口 孝 東アジア国家と社会の比較理論枠組
- 2. 徳田 教之 中国の政治構造
- 3. 石井 明 中国の内政と外交
- 4. 国分 良成 中国の政治過程
- 5. 天児 慧 中国の社会変動と政治
- 6. 若林 正文 台湾の政治
- 7. 白石 昌也 ベトナムの国家と社会
- 8. 五島 文雄 ベトナムの政治指導

VIII 研究活動

9. 小此木政夫 朝鮮半島の政治外交指導
10. 鐸木 昌之 北朝鮮の国家と社会

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治

主任 田中

1. 田中 明彦 米国の対アジア外交
2. 猪口 孝 日本の対アジア外交
3. 山影 進 アセアンの国際政治
4. 小島 朋之 中国の対外政策
5. 古田 元夫 ベトナムの民族問題と外交
6. 伊豆見 元 朝鮮半島の国際政治
7. 黒柳 米司 アセアンの内政と外交
8. 岩田 賢司 ソ連の対アジア外交

比較文化研究の方法

主任 岡本

1. 加藤 祐三 「比較」と「関係」の理論
2. 小島 毅 政治的・社会的に儒教が果たした役割
3. 田辺 勝美 世界美術の中の日本文化
4. 岡本 サエ 中国研究における比較思想の方法
5. 吉田 忠 科学思想における比較研究
6. 加納 啓良 東南アジア比較経済史 1
7. 原 洋之介 東南アジア比較経済史 2
8. 小倉 泰 南インドと東南アジアの思想交流
9. 清水 学 イブンハルドゥーンの再検討
10. 鈴木 董 西欧世界とオスマン帝国の交渉史

植民地体制と農業の商業化

主任 柳澤

1. 濱下 武志 中国
2. 宮嶌 博史 朝鮮

- | | |
|----------|----------|
| 3. 加納 啓良 | インドネシア |
| 4. 原 洋之介 | タイ・マレーシア |
| 5. 柳澤 悠 | インド |
| 6. 友杉 孝 | スリランカ |
| 7. 加藤 博 | エジプト |

殷周社会の総合的研究

主任 松丸

- | | |
|-----------|-----------------------|
| 1. 松丸 道雄 | 殷王朝の精神的基盤 |
| 2. 石田 千秋 | 甲骨文に見える殷代の祭祀と聖處 |
| 3. 豊田 久 | 甲骨文から見た殷代地方支配の構造 |
| 4. 量 博満 | 殷代の墓葬から見た社会 |
| 5. 高山 節也 | 殷周革命と周礼 |
| 6. 持井 康孝 | 殷周時代の地方勢力とその文化的基盤 |
| 7. 飯島 武次 | 周原地域出土土器の性格 |
| 8. 西江 清高 | 周系土器の変遷より見た西周文化の成立と発展 |
| 9. 武者 章 | 西周時代の官制 |
| 10. 谷 豊信 | 考古学から見た燕国史 |
| 11. 平勢 隆郎 | 侯馬盟書と六国文字 |

六朝隋唐思想の総合的研究

主任 蜂屋

- | | |
|----------|-----------------|
| 1. 蜂屋 邦夫 | 六朝隋唐における思想の交渉形態 |
| 2. 戸川 芳郎 | 六朝における義疏学の形成 |
| 3. 影山 輝国 | 六朝における経学の展開 |
| 4. 吉田 純 | 六朝時代の経典解釈学 |
| 5. 松川 育代 | 六朝の儒学と歴史思想 |
| 6. 小島 毅 | 唐代の礼思想 |
| 7. 澤田多喜男 | 六朝における道家思想の展開 |
| 8. 池田 知久 | 六朝隋唐における老荘注釈学 |

VIII 研究活動

9. 高橋 忠彦 道教思想の形成過程
10. 原田 二郎 道教思想と中国医学
11. 丘山 新 仏典の翻訳と伝統思想
12. 末木文美士 六朝隋唐思想に与えた仏教思想の影響
13. 菅野 博史 六朝隋唐思想における仏性思想
14. 松岡 栄志 六朝隋唐の伝統思想と文学思想
15. 藤本 幸夫 朝鮮文献よりみた中国伝統思想

東アジアにおける仏教経典の受容

主任 丘山

1. 丘山 新 仏典の翻訳論
2. 神塚 淑子 漢訳仏典と道教
3. 河野 訓 中国における仏典の翻訳史
4. 水上 文義 隋唐における漢訳仏典の思想的展開
5. 岩松 浅夫 漢訳仏典の語彙・音韻的研究
6. 辛嶋 静志 プラークリット仏典の研究
7. 下田 正弘 インドにおける大乘経典の成立史

東アジア前近代官僚制の研究

主任 池田

1. 福井 重雅 漢代の官僚制度と政治思想
2. 尾形 勇 中国古代国家構造と官人支配
3. 窪添 慶文 北朝官僚制の構造
4. 池田 温 隋唐官人制の構造と特質
5. 岡野 誠 中国律令と官僚支配
6. 小島 毅 中国の国家儀礼と政治秩序
7. 川村 康 唐宋時代の法の構造と特質
8. 佐竹 靖彦 宋元時代の官僚制度
9. 小口 彦太 中国伝統官僚制の解体
10. 西澤奈津子 唐日職員令の構成と性格

11. 大津 透 日唐財政制度の特質と比較
12. 石上 英一 日本律令制の形成と展開

華南の地域社会と地方文学

主任 田仲

1. 田仲 一成 広東の演劇（粵劇，潮劇，惠劇）
2. 末成 道男 広東・台湾客家の習俗
3. 濱下 武志 広東の経済と地域社会
4. 片山 剛 広東の村落
5. 戸倉 英美 広東の民謡（山歌）と民話
6. 西川喜久子 広東の宗族
7. 平山 久雄 閩粵の言語
8. 王 崧 興 閩粵の習俗
9. 大里 浩秋 閩粵の秘密結社
10. 岡本 サエ 閩浙の文人結社
11. 丸尾 常喜 江南の習俗と近代文学
12. 山之内正彦 江南の風物と唐宋の詩詞
13. 大木 康 江南の説唱
14. 松岡 俊裕 江南の文人
15. 廣瀬 玲子 江南の戯曲

中国一九三〇年代の文学

主任 丸尾

1. 芦田 肇 茅盾と鄭振鐸
2. 尾崎 文昭 三〇年代の北京の文学状況
3. 近藤 龍哉 胡風をめぐる諸問題
4. 佐治 俊彦 三〇年代の演劇
5. 坂井 洋史 巴金とアナキズム運動の周辺
6. 鈴木 正夫 郁達夫とその周辺
7. 丸尾 常喜 新文学と伝統社会

VIII 研究活動

8. 丸山 昇 晩年の魯迅
9. 溝口 雄三 民国の思想と文学
10. 伊藤 徳也 周作人とその周辺

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究

主任 濱下

1. 濱下 武志 17世紀以降東アジア経済の展開
—欧米の公私文書分析を含めて—
2. 岸本 美緒 明清期経済の動態と意識の構造
3. 上田 信 明清契約文書より見た社会関係
4. 寺田 浩明 明清期の契約法慣習の論理
5. 張 士 陽 明清期台湾公私文書分析
6. 臼井佐知子 清末契約文書の社会経済史的な分析
7. リンダ・グローヴ 民国時代公私文書より見た農村経済
8. 久保 亨 民国時代公私文書より見た経済構造
9. 宮嶌 博史 朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討

主任 戸田

1. 戸田 禎佑
2. 小川 裕充
3. 林 秀 薇
4. 関口 正之
5. 海老根聡郎
6. 嶋田 英誠
7. 湊 信幸
8. 宮崎 法子
9. 藤田 伸也
10. 救仁郷秀明

特に専門別の分担を定めず、本年は北米圏及び日本の個人コレクター所蔵の中国画の調査を重点的に行なう。

朝鮮における社会変動と民衆—李朝期から近代まで—

主任 宮嶌

1. 武田 幸男 李朝後期の身分制とその変動
2. 吉田 光男 李朝戸籍を通じてみた社会変動
3. 吉野 誠 李朝後期の国家財政と社会変動
4. 山内 弘一 李朝後期の地方財政
5. 小川 晴久 ソンビと実学
6. 趙 景 達 朝鮮開化派の思想
7. 康 成 銀 渡日朝鮮人の日本における活動と思想形成
8. 宮嶌 博史 土地調査事業と農村構造の変動
9. 尹 健 次 朝鮮民衆運動における民族意識と国家意識
10. 宮田 節子 1920年代の地方支配と府・面協議会
11. 並木 真人 植民地期の社会変動と民族運動
12. 姜 徳 相 独立運動における社会主義と民族主義

インド亜大陸における社会変動と政治構造

主任 柳澤

1. 辛島 昇 南インドにおける社会構造の変動
2. 水島 司 南インドにおける社会変動とカースト
3. 中里 成章 ベンガル農村における社会変動
4. 長崎 暢子 北インドにおける民衆意識と政治行動
5. 粟屋 利江 ケーララにおける社会・政治変動
6. 柳澤 悠 南インド農村における経済変動と社会構造
7. 山本由美子 近代インドにおける宗教と社会変動
8. 中村 平次 インド亜大陸における諸民族形成
9. 古賀 正則 インド亜大陸からの海外移民と社会変動
10. 竹中 千春 インドの独立と民衆運動
11. 佐藤 宏 現代インド亜大陸の政治変動

インド古代叙事詩の研究

主任 上村

VIII 研究活動

1. 永ノ尾信悟 ヴェーダ祭式と叙事詩
2. 上村 勝彦 叙事詩の神話
3. 小倉 泰 叙事詩と宗教儀礼
4. 土田龍太郎 初期ヴェーダ文献と叙事詩
5. 山崎 元一 叙事詩と古代インドの社会
6. 羽矢 辰夫 初期仏典と叙事詩
7. 吉岡 司郎 叙事詩の文献学的研究
8. 渡瀬 信之 叙事詩と法典
9. 横地 優子 叙事詩とプラーナ
10. 高橋 孝信 タミルの叙事詩

東南アジアの国家形成と社会経済変容

主任 加納

1. 加納 啓良 インドネシアの経済開発と農村社会
2. 土屋 健治 インドネシアの国民統合と民衆意識
3. 土佐 弘之 島嶼部東南アジアの政治発展とマイノリティー問題
4. 桜井由躬雄 ベトナム農村社会の歴史的研究
5. 古田 元夫 インドシナの社会主義と民衆意識
6. 白石 昌也 ベトナムの民族形成と対日関係
7. 友杉 孝 タイの社会変動と民衆意識
8. 末廣 昭 タイの資本蓄積史と企業集団の形成

ジャワ農村経済史の比較実証研究

主任 加納

1. 加納 啓良 農家センサス調査と歴史的比較
2. 田中 学 農業生産構造と国際比較
3. 水野 広祐 農業外就業と地域間比較

アジア都市比較の課題と方法

主任 友杉

1. 陣内 秀信 江戸・東京の都市空間の特質

- | | | |
|-----|-------|------------------------|
| 2. | 妹尾 達彦 | 中国中世都市 |
| 3. | 大木 康 | 中国都市と大衆文芸・芸能 |
| 4. | 生田 滋 | 東南アジア前近代における都市の形成と人口移動 |
| 5. | 清水 展 | フィリピンの都市とフォーク・カトリシズム |
| 6. | 友杉 孝 | タイ・スリランカの地方商業都市 |
| 7. | 小倉 泰 | 中世インドの都市 |
| 8. | 羽田 正 | イランの都市 |
| 9. | 坂本 勉 | 近代イラン・トルコ都市の比較 |
| 10. | 鈴木 董 | 近世トルコの都市 |
| 11. | 林 佳世子 | 中世イスラムの都市 |
| 12. | 黒木 英充 | 近代アラブ都市の構造 |
| 13. | 本村 凌二 | 古代地中海都市の特質 |

近代アジア社会研究の方法的課題

主任 濱下

- | | | |
|----|-------|-------------------|
| 1. | 宮脇 博史 | 近代アジアの土地変革—方法的探究— |
| 2. | 濱下 武志 | 近代中国とヨーロッパ |
| 3. | 柳澤 悠 | 南アジア農村研究の方法 |
| 4. | 鈴木 董 | 西アジア政治社会史の方法 |
| 5. | 加納 啓良 | 東南アジア比較経済史の方法 |

ジャーヒリーヤからイスラームへ

主任 後藤

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 1. | 蔀 勇造 | 古代南アラビア文明 |
| 2. | 後藤 明 | イスラーム勃興期のアラビア社会 |
| 3. | 花田 宇秋 | 大征服時代のアラビア社会 |
| 4. | 佐々木淑子 | 初期イスラーム文明 |

比較イスラム制度史の研究

主任 鈴木

- | | | |
|----|-------|-------|
| 1. | 花田 宇秋 | ウマイア朝 |
|----|-------|-------|

VIII 研究活動

2. 佐藤 次高 マムルーク朝 (エジプト)
3. 三浦 徹 マムルーク朝 (シリア)
4. 私市 正年 マグリブ
5. 鈴木 董 オスマン朝
6. 林 佳世子 オスマン朝
7. 羽田 正 サファヴィー朝

都市社会と宗教施設

主任 羽田

1. 小倉 泰 インドにおける宗教施設
2. 私市 正年 マグリブにおける宗教施設
3. 小松 久男 中央アジアにおける宗教施設
4. 羽田 正 イランにおける宗教施設
5. 林 佳世子 トルコにおける宗教施設
6. 三浦 徹 アラブにおける宗教施設

イスラム史料の総合的研究

主任 鈴木

1. 坂本 勉 イラン・トルコ比較社会史
2. 八尾師 誠 近代イラン史
3. 羽田 正 前近代イラン・トルコ関係史
4. 鈴木 董 オスマン史
5. 林 佳世子 前近代オスマン社会史
6. 黒木 英充 近代シリア史
7. 加藤 博 近代エジプト史
8. 私市 正年 マグリブ史

ダイバー写本コレクションの文献学的研究

主任 鎌田

1. 小田 淑子
2. 鎌田 繁

3. 後藤 明
4. 小林 春夫
5. 佐藤 次高
6. 杉田 英明
7. 竹下 政孝
8. 東長 靖
9. 中村廣治郎
10. 林 佳世子
11. 藤井 守男

特に専門別に分担を定めず、本年は写本の網羅的検討を行う。

附属東洋学文献センター

アジア研究の為の諸資料の収集及びデータベースの作成

主任 岡本

1. 岡本 サエ
2. 田中 明彦
3. 宮脇 博史
4. 丘山 新
5. 林 秀 薇
6. 加納 啓良
7. 小倉 泰
8. 羽田 正
9. 山田 直子

文献センター専門委員会を中心として構成され、資料収集等に関する重点的課題について研究する。

1992年度研究計画

東アジア研究における人類学と歴史学の接点

主任 末成

1. 宮永 國子 日本・宗教人類学
2. 末成 道男 韓国・社会人類学

VIII 研究活動

3. 王 崧 興 台湾・社会人類学
4. 瀬川 昌久 香港・文化人類学
5. 桐本 東太 中国・古代史
6. 上田 信 中国・社会史

アジア諸社会における文化像の生産と消費

主任 関本

1. 関本 照夫 集団と文化の自己主張
2. 福嶋 真人 マスメディア
3. 船曳 建夫 演劇
4. 山下 晋司 観光
5. 中村 雄祐 大衆音楽
6. 内堀 基光 神話の再生産
7. 落合 一泰 写真
8. 富沢 寿勇 文化政策
9. 葛野 浩昭 少数民族
10. 塩田 光喜 口承芸能

アジア農村の現地研究の方法と過程

主任 友杉

1. 宮口 侗廸 山村の構造－日本－
2. 友杉 孝 むらと水利－タイ－
3. 堀井 健三 米作農村と土地所有－マレーシア－
4. 菱口 善美 村落と農業－インド，バングラデシュ－
5. 中村 尚司 共同体と水利－スリランカ－
6. 後藤 晃 灌漑農業論－西アジア－

構造調整下のアジア経済の展望

主任 原

1. 原 洋之介 構造調整と国際経済
2. 杉本 義行 構造調整と国際貿易

- 3. 今岡日出紀 構造調整とマクロ経済
- 4. 藤田 夏樹 構造調整と産業構造
- 5. 新谷 正彦 構造調整と技術変化
- 6. 永田 信 構造調整と資源保全
- 7. 福井 清一 構造調整と農村経済
- 8. 石田 正昭 構造調整と農業成長
- 9. 本台 進 構造調整と産業組織
- 10. 田島 俊雄 構造調整と中国経済

東アジアの国家と社会

主任 猪口

- 1. 猪口 孝 東アジア国家と社会の比較理論枠組
- 2. 徳田 教之 中国の政治構造
- 3. 石井 明 中国の内政と外交
- 4. 国分 良成 中国の政治過程
- 5. 天児 慧 中国の社会変動と政治
- 6. 若林 正文 台湾の政治
- 7. 白石 昌也 ベトナムの国家と社会
- 8. 五島 文雄 ベトナムの政治指導
- 9. 小此木政夫 朝鮮半島の政治外交指導
- 10. 鐸木 昌之 北朝鮮の国家と社会

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治

主任 田中

- 1. 田中 明彦 米国の対アジア外交
- 2. 猪口 孝 日本の対アジア外交
- 3. 山影 進 アセアンの国際政治
- 4. 小島 朋之 中国の対外政策
- 5. 古田 元夫 ベトナムの民族問題と外交
- 6. 伊豆見 元 朝鮮半島の国際政治

VIII 研究活動

7. 黒柳 米司 アセアンの内政と外交
8. 岩田 賢司 ソ連の対アジア外交

比較文化研究の方法

主任 岡本

1. 加藤 祐三 「比較」と関係」の理論
2. 関本 照夫 文化間比較の可能性
3. 田辺 勝美 世界美術の中の日本文化
4. 岡本 サエ 中国研究における比較思想の方法
5. 吉田 忠 科学思想における比較研究
6. 加納 啓良 東南アジア比較経済史 1
7. 原 洋之介 東南アジア比較経済史 2
8. 小倉 泰 南インドと東南アジアの思想交流
9. 清水 学 イブンハルドゥーンの再検討
10. 鈴木 董 西欧世界とオスマン帝国の交渉史

植民地体制と農業の商業化

主任 柳澤

1. 濱下 武志 中国
2. 宮嶌 博史 朝鮮
3. 加納 啓良 インドネシア
4. 原 洋之介 タイ・マレーシア
5. 柳澤 悠 インド
6. 友杉 孝 スリランカ
7. 加藤 博 エジプト

殷周社会の総合的研究

主任 松丸

1. 松丸 道雄 殷王朝の精神的基盤
2. 石田 千秋 甲骨文に見える殷代の祭祀と聖處
3. 豊田 久 甲骨文から見た殷代地方支配の構造

4. 量 博満 殷代の墓葬から見た社会
5. 高山 節也 殷周革命と周礼
6. 持井 康孝 殷周時代の地方勢力とその文化的基盤
7. 武者 章 新出青銅器より見た殷周古代国家の成立と展開
8. 飯島 武次 周原地域出土土器の性格
9. 西江 清高 周系土器の変遷より見た西周文化の成立と発展
10. 竹内 康浩 西周青銅器を通して見た西周王朝支配の実態
11. 谷 豊信 考古学から見た燕国史
12. 平勢 隆郎 侯馬盟書と六国文字

六朝隋唐思想の総合的研究

主任 蜂屋

1. 蜂屋 邦夫 六朝隋唐における思想の交渉形態
2. 影山 輝国 六朝における経学の展開
3. 吉田 純 六朝時代の経典解釈学
4. 松川 育代 六朝の儒学と歴史思想
5. 池田 知久 六朝隋唐における老荘注釈学
6. 高橋 忠彦 道教思想の形成過程
7. 原田 二郎 道教思想と中国医学
8. 丘山 新 仏典の翻訳と伝統思想
9. 末木文美士 六朝隋唐思想に与えた仏教思想の影響
10. 菅野 博史 六朝隋唐思想における仏性思想
11. 松岡 栄志 六朝隋唐の伝統思想と文学思想
12. 藤本 幸夫 朝鮮文献よりみた中国伝統思想

東アジアにおける仏教経典の受容

主任 丘山

1. 丘山 新 仏典の翻訳論
2. 神塚 淑子 漢訳仏典と道教
3. 河野 訓 中国における仏典の翻訳史

VIII 研究活動

4. 水上 文義 隋唐における漢訳仏典の思想的展開
5. 岩松 浅夫 漢訳仏典の語彙・音韻的研究
6. 辛嶋 静志 プラークリット仏典の研究
7. 下田 正弘 インドにおける大乘経典の成立史

華南の地域社会と地方文学

主任 田仲

1. 田仲 一成 広東の演劇（粵劇，潮劇，恵劇）
2. 末成 道男 広東・台湾客家の習俗
3. 濱下 武志 広東の経済と地域社会
4. 片山 剛 広東の村落
5. 戸倉 英美 広東の民謡（山歌）と民話
6. 西川喜久子 広東の宗族
7. 谷垣真理子 香港の政治と世論
8. 平山 久雄 閩粵の言語
9. 王 崧 興 閩粵の習俗
10. 大里 浩秋 閩粵の秘密結社
11. 岡本 サエ 閩浙の文人結社
12. 丸尾 常喜 江南の習俗と近代文学
13. 山之内正彦 江南の風物と唐宋の詩詞
14. 大木 康 江南の説唱
15. 松岡 俊裕 江南の文人
16. 廣瀬 玲子 江南の戯曲
17. 大塚 秀高 江南の小説

中国一九三〇年代の文学

主任 丸尾

1. 芦田 肇 茅盾と鄭振鐸
2. 伊藤 徳也 周作人とその周辺
3. 尾崎 文昭 三〇年代の北京の文学状況

- 4. 菊田 正信 三〇年代の国語問題
- 5. 近藤 龍哉 胡風をめぐる諸問題
- 6. 佐治 俊彦 三〇年代の演劇
- 7. 坂井 洋史 巴金とアナキズム運動の周辺
- 8. 鈴木 正夫 郁達夫とその周辺
- 9. 藤井 省三 三〇年代の上海の文学状況
- 10. 丸尾 常喜 新文学と伝統社会
- 11. 溝口 雄三 民国の思想と文学

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究

主任 濱下

- 1. 濱下 武志 17世紀以降東アジア経済の展開
—欧米の公私文書分析を含めて—
- 2. 川村 康 旧中国社会の法構造
- 3. 岸本 美緒 明清期経済の動態と意識の構造
- 4. 上田 信 明清契約文書より見た社会関係
- 5. 寺田 浩明 明清期の契約法慣習の論理
- 6. 張 士 陽 明清期台湾公私文書分析
- 7. 臼井佐知子 清末契約文書の社会経済史的な分析
- 8. リンダ・グローヴ 民国時代公私文書より見た農村経済
- 9. 久保 亨 民国時代公私文書より見た経済構造
- 10. 宮嶌 博史 朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討

主任 戸田

- 1. 戸田 禎佑
- 2. 小川 裕充
- 3. 林 秀 薇
- 4. 関口 正之
- 5. 海老根聡郎

特に専門別の分担を定めず、本年は東アジア圏及び日本

VIII 研究活動

- | | |
|-----------|-------------------------------|
| 6. 嶋田 英誠 | の公私コレクションに所蔵される中国画の調査を重点的に行う。 |
| 7. 湊 信幸 | |
| 8. 宮崎 法子 | |
| 9. 藤田 伸也 | |
| 10. 救仁郷秀明 | |
| 11. 井出誠之輔 | |

朝鮮における社会変動と民衆—李朝期から近代まで—

主任 宮嶌

- | | |
|-----------|---------------------|
| 1. 武田 幸男 | 李朝後期の身分制とその変動 |
| 2. 吉田 光男 | 李朝戸籍を通じてみた社会変動 |
| 3. 吉野 誠 | 李朝後期の国家財政と社会変動 |
| 4. 山内 弘一 | 李朝後期の地方財政 |
| 5. 小川 晴久 | ソンビと実学 |
| 6. 趙 景 達 | 朝鮮開化派の思想 |
| 7. 康 成 銀 | 渡日朝鮮人の日本における活動と思想形成 |
| 8. 宮嶌 博史 | 土地調査事業と農村構造の変動 |
| 9. 尹 健 次 | 朝鮮民衆運動における民族意識と国家意識 |
| 10. 宮田 節子 | 1920年代の地方支配と府・面協議会 |
| 11. 並木 真人 | 植民地期の社会変動と民族運動 |
| 12. 姜 徳 相 | 独立運動における社会主義と民族主義 |

インド亜大陸における社会変動と政治構造

主任 柳澤

- | | |
|----------|---------------------|
| 1. 辛島 昇 | 南インドにおける社会構造の変動 |
| 2. 水島 司 | 南インドにおける社会変動とカースト |
| 3. 中里 成章 | ベンガル農村における社会変動 |
| 4. 長崎 暢子 | 北インドにおける民衆意識と政治行動 |
| 5. 粟屋 利江 | ケーララにおける社会・政治変動 |
| 6. 柳澤 悠 | 南インド農村における経済変動と社会構造 |

- 7. 山本由美子 近代インドにおける宗教と社会変動
- 8. 竹中 千春 インドの独立と民衆運動
- 9. 佐藤 宏 現代インド亜大陸の政治変動

インド古代叙事詩の研究

主任 上村

- 1. 永ノ尾信悟 ヴェーダ祭式と叙事詩
- 2. 上村 勝彦 叙事詩の神話
- 3. 小倉 泰 叙事詩と宗教儀礼
- 4. 土田龍太郎 初期ヴェーダ文献と叙事詩
- 5. 山崎 元一 叙事詩と古代インドの社会
- 6. 羽矢 辰夫 初期仏典と叙事詩
- 7. 吉岡 司郎 叙事詩の文献学的研究
- 8. 渡瀬 信之 叙事詩と法典
- 9. 水野 善文 初期ヒンディー文学と叙事詩

インド儀礼の総合的研究

主任 永ノ尾

- 1. 後藤 敏文 言語・文献研究から収集される古代インド儀礼に関する知見
- 2. 高橋 孝信 古代タミルの儀礼
- 3. 永ノ尾信悟 ヒンドゥー儀礼の成立と展開
- 4. 上村 勝彦 サンスクリット文芸作品と儀礼
- 5. 横地 優子 プラーナ文献における儀礼資料の集成
- 6. 高島 淳 シヴァ教アーガマの儀礼
- 7. 小倉 泰 ヒンドゥー儀礼と寺院建築
- 8. 藤井 正人 現代インドにおけるヴェーダ祭式伝統の研究
- 9. 石井 溥 ネワール, ミティラー, パルバテ・ヒンドゥー社会における儀礼の比較研究
- 10. 山下 博司 南インド社会の儀礼の性格と変容

VIII 研究活動

11. 関根 康正 南インド村落における通過儀礼と宗教儀礼

東南アジアの国家形成と社会経済変容

主任 加納

1. 加納 啓良 インドネシアの国家形成と村落の変容
2. 土屋 健治 インドネシアの国民統合と政治文化
3. 土佐 弘之 島嶼部東南アジアの政治発展とマイノリティー問題
4. 藤原 帰一 フィリピンの政治変動と民主化
5. 桜井由躬雄 大陸部東南アジアの農地開拓史と国家形成
6. 古田 元夫 インドシナの社会主義とエスニシティー
7. 白石 昌也 ベトナムの民族形成と対日関係
8. 友杉 孝 タイの社会変動と民衆意識
9. 末廣 昭 タイの経済発展と企業グループの形成

ジャワ農村経済史の比較実証研究

主任 加納

1. 加納 啓良 農家センサス調査と歴史的比較
2. 田中 学 農業生産構造と国際比較
3. 水野 広祐 農業外就業と地域間比較

アジア都市比較の課題と方法

主任 友杉

1. 陣内 秀信 江戸・東京の都市空間の特質
2. 松井 健 那覇の歴史と都市景観
3. 妹尾 達彦 中国中世都市
4. 大木 康 中国都市と大衆文芸・芸能
5. 生田 滋 東南アジア前近代における都市の形成と人口移動
6. 清水 展 フィリピンの都市とフォーク・カトリシズム
7. 友杉 孝 タイ・スリランカの地方商業都市
8. 小倉 泰 中世インドの都市
9. 羽田 正 イランの都市

10. 坂本 勉 近代イラン・トルコ都市の比較
11. 鈴木 董 近世トルコの都市
12. 林 佳世子 中世イスラムの都市
13. 黒木 英充 近代アラブ都市の構造
14. 本村 凌二 古代地中海都市の特質

近代アジア社会研究の方法的課題

主任 濱下

1. 宮脇 博史 近代アジアの土地変革—方法的探究—
2. 濱下 武志 近代中国とヨーロッパ
3. 柳澤 悠 南アジア農村研究の方法
4. 鈴木 董 西アジア政治社会史の方法
5. 加納 啓良 東南アジア比較経済史の方法

ジャーヒリーヤからイスラームへ

主任 後藤

1. 薮 勇造 古代南アラビア文明
2. 後藤 明 イスラーム勃興期のアラビア社会
3. 花田 宇秋 大征服時代のアラビア社会
4. 佐々木淑子 初期イスラーム文明

比較イスラム制度史の研究

主任 鈴木

1. 花田 宇秋 ウマイア朝
2. 佐藤 次高 マムルーク朝 (エジプト)
3. 三浦 徹 マムルーク朝 (シリア)
4. 私市 正年 マグリブ
5. 鈴木 董 オスマン朝
6. 林 佳世子 オスマン朝
7. 羽田 正 サファヴィー朝

VIII 研究活動

都市社会と宗教施設

主任 羽田

1. 小倉 泰 インドにおける宗教施設
2. 私市 正年 マグリブにおける宗教施設
3. 小松 久男 中央アジアにおける宗教施設
4. M. サドリアー 中東における宗教と都市社会
5. 羽田 正 イランにおける宗教施設
6. 林 佳世子 トルコにおける宗教施設
7. 三浦 徹 アラブにおける宗教施設

イスラム史料の総合的研究

主任 鈴木

1. 坂本 勉 イラン・トルコ比較社会史
2. 八尾師 誠 近代イラン史
3. 羽田 正 前近代イラン・トルコ関係史
4. 鈴木 董 オスマン史
5. 林 佳世子 前近代オスマン社会史
6. 黒木 英充 近代シリア史
7. 加藤 博 近代エジプト史
8. 私市 正年 マグリブ史

ダイバー写本コレクションの文献学的研究

主任 鎌田

1. 小田 淑子
2. 鎌田 繁
3. 後藤 明
4. 小林 春夫
5. 佐藤 次高
6. 杉田 英明
7. 竹下 政孝
8. 東長 靖

特に専門別に分担を定めず、本年は写本の網羅的検討を行う。

- 9. 中村廣治郎
- 10. 林 佳世子
- 11. 藤井 守男

附属東洋学文献センター

アジア研究の為の諸資料の収集及びデータベースの作成

主任 岡本

- 1. 鎌田 繁
- 2. 田中 明彦
- 3. 宮嶋 博史
- 4. 丘山 新
- 5. 岡本 サエ
- 6. 加納 啓良
- 7. 小倉 泰
- 8. 羽田 正
- 9. 山田 直子

文献センター専門委員会を中心として構成され、資料情報に関する重点的課題について研究する。

〔班研究報告〕

「東アジア研究における人類学と歴史学の接点」 東アジア地域は、多くの文化的伝統を共有し、歴史学の研究の蓄積は膨大なものがある。人類学的研究がこの地で始められてから一世紀足らずとはいえ、最近本格的モノグラフも相次いでまとめられるなど研究の層が厚くなってきている。しかし、両者の間での交流は、わが国においては、個人的、部分的なものに留まっている。こうした状況を打開するために、相互に踏み込んだ討議をまじえ、その交流の可能性を検討することを目的とする。（末成道男）

「アジア諸社会における国家と伝統的政治体系」（1991年3月終了） 東南アジアを中心に現代の領域主権国家ないし国民国家が、どのように国家の伝統を

VIII 研究活動

創造しているか、とりわけ新しい秩序の文化的イメージを過去の伝統的資源とどう結びつけんとしているかを比較研究。特に、過去の国家伝統をもたないオセアニアの新しい小国家との比較を試みた。中間的成果は『東南アジア・オセアニアにおける国家と国民文化の動態』（1990年）に発表。（関本照夫）

「アジア諸社会における文化像の生産と消費」（1991年4月より） 国民国家体制ができあがり近代的マスメディアが急速に発達しているアジアの諸社会では、国ごとに、またその内部の諸地域ごとに、文化的自己主張がさかんになっている。国の文化政策、国家内部をめぐる政治、トランス・ナショナルなメディアや大衆文化の影響などから、現代アジアの文化状況をさぐる。（関本照夫）

「アジア農村の現地研究の方法と過程」 激しく変化しつつあるアジアの農村を、歴史的背景にも十分に目配りしつつ、現状を動態的に記述する。すなわち、地域研究としての農村社会研究をめざす。研究担当者はすべて農村社会の実態調査を行って、その成果をその都度、研究会で報告をする。日本、タイ、マレーシア、バングラデシュ、スリランカ、イランの諸社会が比較されてきた。共通のキーワードは、実物経済、市場経済、相互性規範、市場、交換、商人、灌漑、環境、政府の役割、情報化、土地所有、賃労働、出稼ぎ。（友杉 孝）

「構造調整下のアジア経済の展望」 現在、多くのアジア諸国が直面している財政赤字・貿易赤字の解消や産業保護政策の再検討あるいは経済構造の調整などの諸問題に、班の各メンバーがそれぞれの専門の立場から検討を行ってきた。しかし、予定していた科研費が認められなかったため、班としての総括的なとりまとめが遅れている。（山田三郎）

「東アジアの国家と社会」 本研究班は、日本、中国、台湾、韓国、北朝鮮、ベトナムの国家と社会の比較研究を進めてきた。冷戦後の東アジア諸国の政治体制の変容を概念化することを目的のひとつとしている。その成果は東京大学出版会からの「叢書 東アジアの国家と社会」全六巻として刊行を計画している。アジア太平洋地域の国際政治班では1980年代末からの激動を概念化し、20世紀の歴史のなかに位置づけを試みている。成果の発表は個々になされている。（猪口 孝）